



同じ境遇の子を支えたい!

大学進学時代を迎えた在日日系第二世代

海外移住資料館で公開講座「他文化共生社会の変容」

JICA横浜海外移住資料館が主催する公開講座「多文化共生社会の変容 一移民第二世代の活躍と日本人側の理解」が3月16日に開かれた。

1990年の出入国管理及び難民認定法の改正後に急増したブラジル等中南米からの日系人を主とする外国人は、日本国内において生活のサポートが必要なマイノリティとして語られてきた。

しかし、2008年のリーマンショックと2011年の東日本大震災は、彼らを取り巻く状況を大きく変化させた。多くが派遣等の不安定な身分で雇用されていた彼らに大量失業の波が押し寄せ、帰国か日本に残留するかを選択を迫られた。32万人いたブラジル人は現在19万人台と10万人以上が帰国。残った者たちは、東日本大震災を、同じ日本に暮らす生活者として体験した。震災直後から在日ブラジル人が、彼らのネットワークを駆使し、炊き出しや救援物資の呼びかけから現地への引き渡しまでめざましい活動を行い注目されたのは記憶に新しい。

公開講座のコーディネーターを務め、外国人集住都市会議アドバイザー、浜松市外国人子ども支援協議会会長も務める池上重弘静岡文化芸術大学文化政策学部教授は、日本にいる外国人を在留資格で見ると、韓国・朝鮮人の特別永住者と永住者等、永住資格を持つ外国人を合わせて全体の約50パーセント。定住者、日本人の配偶者等を含めると65パーセント以上が、すでに実質的には移民であると指摘した。

そして、日本で生活してきた在日日系人第二世代が台頭し、今まさに社会に羽ばたこうとしている。

浜松市にある静岡文化芸術大学は、文化政策学部とデザイン学部を有し、1学年300人規模であるが、ブラジル人10人が在籍している。

発表を行った、文化政策学部国際文化学科2年在学中の宮城ユキミさんは、ブラジル、サンパウロ出身。小学校4年生まではブラジルで教育を受け、2005年、11歳で家族と来日。公立小学校に編入し、中学校を卒業。インターナショナルクラスがある浜松市立高校に進学。同大学に一般入試で合格した。

同じ国際文化学科2年在学中の鈴木由香里さんは、それとは対照的に、1歳半でブラジルから来日。日本の小学校3年生まで過ごした後ブラジルへ帰国。その後再来日し浜松のブラジル人学校で義務教育を終え、中学2年の3学期に編入卒業後、浜松市立高等



来場者からの質問に答える池上教授(左)と鈴木さん(中)宮城さん(右)

学校のインターナショナルクラスに進学。同大に一般入試で合格した。2013年にはイギリスのウェールズ大学へ3カ月の留学も経験した。

このように、小学校、中学校とブラジルと日本との間の移動を経験し、言葉や文化の違い、教育制度の違いに翻弄された二人に共通する思いは「同じ境遇の子どもたちを支えたい」

ともに、浜松国際交流協会(HICE)や、母校の静岡文化芸術大で、イベントを企画し、外国人子弟への教育支援や多文化共生社会実現のための活動を積極的に推進している。13年2月にHICEで行ったイベント「リスタート」では、ペルー、ベトナム、フィリピンの学生等と企画し、自身の経験をもとに「リスタートはいつでもできる」とマイノリティである外国人の子どもたちに直接訴えた。また6月に母校で「多文化子ども教育フォーラム」を実施。「教育支援策をめぐって当事者学生が物申す」と題し、外国人児童生徒に対する教育支援の課題や対策について意見発表した。

二人が卒業した浜松市立高校は、一年次にインターナショナルクラスがあり、「異なる外国籍の生徒が母国語を学びながら大学進学に向かって切磋琢磨できたことが大きかった」と宮城さんは発表の中で語った。

マイノリティである立場を個性と考え、外国人だと堂々とアピールしたいという宮城さんだが、目下不安に思っているのは就職だという。

「自分は日本で育ち、日本の文化を身につけ、日本人の血を引いているが、日本国籍を持たないので、日本人ではない」と話す。

「外国籍だからと言って排除しないで欲しい。多種多様な人がいて当たり前。すべてを受け入れる日本社会であって欲しい。それが多文化共生社会の第一歩」と結んだ。



同じ境遇の子を支えたい!

大学進学時代を迎えた在日日系第二世代

海外移住資料館で公開講座「他文化共生社会の変容」

JICA横浜海外移住資料館が主催する公開講座「多文化共生社会の変容 一移民第二世代の活躍と日本人側の理解」が3月16日に開かれた。

1990年の出入国管理及び難民認定法の改正後に急増したブラジル等中南米からの日系人を主とする外国人は、日本国内において生活のサポートが必要なマイノリティとして語られてきた。

しかし、2008年のリーマンショックと2011年の東日本大震災は、彼らを取り巻く状況を大きく変化させた。多くが派遣等の不安定な身分で雇用されていた彼らに大量失業の波が押し寄せ、帰国か日本に残留するかを選択を迫られた。32万人いたブラジル人は現在19万人台と10万人以上が帰国。残った者たちは、東日本大震災を、同じ日本に暮らす生活者として体験した。震災直後から在日ブラジル人が、彼らのネットワークを駆使し、炊き出しや救援物資の呼びかけから現地への引き渡しまでさまざまな活動を行い注目されたのは記憶に新しい。

公開講座のコーディネーターを務め、外国人集住都市会議アドバイザー、浜松市外国人子ども支援協議会会長も務める池上重弘静岡文化芸術大学文化政策学部教授は、日本にいる外国人を在留資格で見ると、韓国・朝鮮人の特別永住者と永住者等、永住資格を持つ外国人を合わせて全体の約50パーセント。定住者、日本人の配偶者等を含めると65パーセント以上が、すでに実質的には移民であると指摘した。

そして、日本で生活してきた在日日系人第二世代が台頭し、今まさに社会に羽ばたこうとしている。

浜松市にある静岡文化芸術大学は、文化政策学部とデザイン学部を有し、1学年300人規模であるが、ブラジル人10人が在籍している。

発表を行った、文化政策学部国際文化学科2年在学中の宮城ユキミさんは、ブラジル、サンパウロ出身。小学校4年生まではブラジルで教育を受け、2005年、11歳で家族と来日。公立小学校に編入し、中学校を卒業。インターナショナルクラスがある浜松市立高校に進学。同大学に一般入試で合格した。

同じ国際文化学科2年在学中の鈴木由香里さんは、それとは対照的に、1歳半でブラジルから来日。日本の小学校3年生まで過ごした後ブラジルへ帰国。その後再来日し浜松のブラジル人学校で義務教育を終え、中学2年の3学期に編入卒業後、浜松市立高等



来場者からの質問に答える池上教授(左)と鈴木さん(中)宮城さん(右)

学校のインターナショナルクラスに進学。同大に一般入試で合格した。2013年にはイギリスのウェールズ大学へ3カ月の留学も経験した。

このように、小学校、中学校とブラジルと日本との間の移動を経験し、言葉や文化の違い、教育制度の違いに翻弄された二人に共通する思いは「同じ境遇の子どもたちを支えたい」

ともに、浜松国際交流協会(HICE)や、母校の静岡文化芸術大で、イベントを企画し、外国人子弟への教育支援や多文化共生社会実現のための活動を積極的に推進している。13年2月にHICEで行ったイベント「リスタート」では、ペルー、ベトナム、フィリピンの学生等と企画し、自身の経験をもとに「リスタートはいつでもできる」とマイノリティである外国人の子どもたちに直接訴えた。また6月に母校で「多文化子ども教育フォーラム」を実施。「教育支援策をめぐって当事者学生が物申す」と題し、外国人児童生徒に対する教育支援の課題や対策について意見発表した。

二人が卒業した浜松市立高校は、一年次にインターナショナルクラスがあり、「異なる外国籍の生徒が母国語を学びながら大学進学に向かって切磋琢磨できたことが大きかった」と宮城さんは発表の中で語った。

マイノリティである立場を個性と考え、外国人だと堂々とアピールしたいという宮城さんだが、目下不安に思っているのは就職だという。

「自分は日本で育ち、日本の文化を身につけ、日本人の血を引いているが、日本国籍を持たないので、日本人ではない」と話す。

「外国籍だからと言って排除しないで欲しい。多種多様な人がいて当たり前。すべてを受け入れる日本社会であって欲しい。それが多文化共生社会の第一歩」と結んだ。

在日
ニッケイ人は
今...

夢は母国ペルーの子どもたちの教育支援

海外日系人協会インターン 松田デレクさん

デカセギの子として来日

ペルー生まれ。移住したのはひいおじいさん、ひいおばあさんの代なので四世になる。

一昨年、昨年と、当協会が実施した「第53回海外日系人大会」「第54回海外日系人大会」の代表者会議で「日系ユース部会」の議長を務め、留学生ら若い世代の意見をまとめ発表した。現在、海外日系人協会インターンとして、日系人相談センターでスペイン語での相談もこなす。日本財団日系スカラシップ留学生の中でも若い25才。関西学院大3年在学中に同奨学金を得て卒業。さらに上智大大学院に進み、総合人間科学研究科教育学専攻博士前期課程で修士論文を書き上げ、4月からは後期課程に入る。順調にいけば3年後若干28才の博士が誕生することになる。

文字面だけで経歴を追うと超エリート。苦勞知らずのサラブレッドであるかのようだが、実はデカセギの子として来日した一人だ。

前日に告げられた引っ越し

先に来ていた大阪の両親の元へ、妹、弟とペルーから移ってきたのは1997年。9才の時だった。日本語は全くできなかったの、年齢より一つ下の3年生に編入された。学校では1年経って日本語が覚えられなかったら1年生からやってもらおうと言われたが、言葉はすぐに覚え学校にもなじんだ。いじめにあった経験もないという。ペルーでは小学校から落第があるので、一つ下の学年になったのには、かなりプライドを傷つけられたようだ。

妹、弟とは年が離れていたの、学校から帰ると、残業で帰りの遅い両親に変わり面倒をみる毎日だった。中学に入ると成績も上がり、特に英語は他に抜きでいた。親身になってくれる先生の助けを得ながら高校受験の準備を着々と進めていた。

ところが、父親の仕事の関係で、3年生3学期の3カ月を残し転校せざるを得なくなった。それも引っ越し前日に親に告げられ、一度帰宅したところを学校に事情を説明しに戻ったという。先生もさぞや面食らったことだろう。友達に別れを言う暇もない。「黒板にメッセージでも書いていく?」って言われたけど、先生もそれを言うのが精一杯。自分も、なにがなんだか分からない。それどころじゃないという気持ちだった

公立高校へ進学

引っ越しの手伝いを終え、放課後の中学校へ行き、書類も何も

ないまま「今度この校区に引っ越してきたので、明日から通わせてください」と再び職員室をどよめかせたが、新しい学校でもよい先生に巡り会えた。

結局、最初の卒業生を出したばかりの公立高校に進学した。普通課総合選択制というシステムの学校で、スポーツや音楽、理系などコースを選択できた。



日本での学校生活を振り返る松田さん



日系人相談センターではスペイン語相談員としても活躍

学費はアルバイトをして自分で稼いだ。英語力をのばして、多くの在日日系人の子どもがまず考えるように通訳になりたいと思っていた。ただしコミュニティの中でではなく、国際会議で活躍できるようなレベルになりたいと、いろいろ調べた結果、「大学院へ行く。最低でも大学は出る」と目標を定めた。

母親の提案で、受験勉強が本格化する前の高2の春休みにペルーに里帰りしたことが、後の自身の進路に大きく影響することになった。

初めての里帰りで知ったペルーの真実

ペルーにいたときはまだ幼かったので、自分が生まれた国について何も知らなかったことに気づいた。治安が悪いからということもあるが、「両親、祖父母に守られ、家から出るときは車で目的地の玄関まで」と言う生活だったので外の世界を知らなかった。初めて、市場に行ったり、祖母がしている教会のボランティア活動に同行し貧しい村へ行ったりした。衝撃だった。子どもたちが学校に行かずに路上で物を売っていたり、バスに乗り込んできてお金をせびったりしていた。自分が体験してきた学校生活とは雲泥の差だった。

日本に帰ってから、「あの子どもたちを、世の中で誰かが、助けているのか、何かしているのか」調べ始めて、ユニセフ(国連児童基金)やユネスコ(国際連合教育科学文化機関)などの国連機関の存在に行き当たった。

それで、国際公務員、国連職員になりたいと思うようになったが、そうすると「やはり大学院を出なければ。まず国際公務員を経験した教員がいる大学に入らなければ」と思い関西学院大に進学した。

挫折しかけた大学院進学

東京の名門私立大学にも合格したが、関西学院を選んだのは、下宿をせずに通えると思ったことと、国際公務員として国連関係の仕事をしている教員が多くいたからだ。ところが、その総合政策学部のキャンパスは兵庫県三田市にあり、自宅のある大阪府八尾市からは2時間半かかった。往復5時間。大学の学費も自分で出そうと思っていたので授業と通学の時間以外はアルバイトに費やされた。深夜の仕事もあり、2年生のとき、目標まではこれがあと2年、さらにまた2年と続くのか……。と考え心が折れかけた。

そんなときに、アルバイトがあるので遊ぶ暇はないと断り続けた友人から、日系ブラジル人の留学生を紹介された。日本財団の日系スカラシップ留学生だった。

日本財団日系スカラシップで近づいた夢

話を聞いて耳を疑った。そんなうまい話があるものかと。経歴書と計画書、作文の書類審査だけで試験もなく、あとは面接に通れば、条件が良く返す必要のない奨学金がもらえ、しかもアルバイトはしなきゃいけないだなんて…。ここは、日系人であるという立場を生きさない手はないと思った。

半信半疑で応募し面接まで進んだ。将来の夢についてつっこんだ真剣な質問もあったが、「普段はどんどこで遊んでいるの」には返答に詰まった。「アルバイトばかりで遊んでいません」と答えるよりほかなかった。

大学院進学はあきらめ、せめて大学だけは卒業し、4年生は就職活動に専念しようと思っていた矢先で、合格の通知が来たときは飛び上がるほどうれしかった。

ゼミの指導教官に奨学金に受かったことを話すと、「もうアルバイトはしなくていいんだね」と喜んでくれ、国連大学でのボランティアを紹介してくれた。卒業に必要な単位は3年生までに取得し、4年生は週1日ゼミに通うだけだったので、面接を受けに上京。試験に受かって国連人口基金(UNFPA)でボランティアができることになった。ついに夢であった国際公務員に一步近づいた。先輩の家に居を移し東京をベースにした生活が始まった。

あこがれの国連で覚えた違和感

いざ国連でボランティアをしてみると、なんとなく違和感を覚えるようになった。内側から見た国連は、ほとんど奉仕活動といってよく、支援の対象は「地球」規模。高校の時に目に焼き付いた祖国ペルーの子どもたちのことが頭に浮かんだ。自分の国が、まだあのような状態なのに他の国の支援をしている場合だろうか。

日本財団日系スカラシップ留学生たちとの交わりも大きかった。メキシコ、ブラジル、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチン、インドネシア、フィリピン、そして同じペルーの同世代の日系の仲間たち。海外日系人大会を通じて知ることができた、様々な国の日系の先輩方。誰もが日系人のアイデンティティ、自分の国のアイデンティティを熱く語った。

特に先輩方からは、それを自分たち若い世代に継承してもらいたいという思いが強く伝わってきた。



海外日系人大会代表者会議で日系ユース部会議長として発表した。

僕は日系ペルー人だ

中学、高校の最初の頃は、ペルー人であることが少し恥ずかしかった。日本ではイメージがよくないと思ったし、マチュピチュやアルパカのことばかり聞かれるのもいやだった。自分も行ったこともないし、見たこともないのに。今では両方とも国の宝だと思えるようになった。いろいろな国から来ている日系の仲間と出会い、ペルー人としての意識が強くなった。自分の国、自分のルーツが大切だと言うことに気づかされた。

教育は国の基礎 子どもは国の宝

ペルーは南米の中でも可能性を秘めた国だ。将来はペルーに帰ってペルーのために働きたい。母国のために何ができるのか。あの高2の春、出会った子どもたち…。教育は国の基礎であり、発展を可能にする最大のツールであると思った。子どもは国の宝だ。

教育のことはよく分からなかったが、大学院は迷わず教育学を専攻した。修士論文は書き終えたが、専門性や研究という面ではまだまだ不足だと感じている。なにより、今回は日本におかれている日系人の子どもたちの話しかカバーしきれていない。

二度目の里帰りが新たな出発

日本とペルーを往復しているような子どもたちや家族にもっと寄り添い、双方を比較して研究し、支援策に結びつけられたらというのが目下の夢だ。

3月にペルーに一度戻り、「日本帰りの子どもたち」に会って話を聞く。次の研究の出発点とする予定だ。新たな目で、子どもたちに接することを楽しみにしている。

日本で学ぼう!

日本財団・日系スカラシップ 「夢の実現プロジェクト」奨学生募集!! 6月より受付開始!



日本財団・日系スカラシップ

居住国と日本との間の理解促進や居住国地域社会の発展に貢献するための具体的な計画や夢を持つ若い日系人に、日本留学の機会を与える、「日本財団・日系スカラシップ」が2015(平成27)年度奨学生を募集する。6月1日から7月31日まで当協会にて応募を受け付ける。

2003年に当協会が日本財団より助成を受け事業を開始。これまでに11期85人が、日本国内の大学院、大学、専門学校、医療機関、民間企業等で、医学、薬学、看護学、鍼灸、経済学、経営学、教育学、農学、水産食品化学、木工、服飾デザインなど、様々な分野で留学を果たしている。

応募資格は、

1. 日系人であること
2. 年齢：原則として18～35歳まで

3. 海外日系団体の推薦を得た者

4. 専門的な技術を身につけ、帰国後、居住国・地域社会で活躍する夢を持つ者

5. 留学経験を活かして、両国の架け橋となる希望を持つ者

6. 留学生の自主的な活動、社会貢献活動に主体的に参加できる者
来日後、日本語学校での学習修了後、大学に入学することを視野に入れ最長5年間の留学期間が認められており、目標が明確であれば、入学が確定していない場合でも応募することが可能だ。

留学生は、自らの専門分野の研鑽に励むとともに、留学生会で自主的に社会貢献活動に取り組んでおり、これまで、在日外国人学校での出前授業、ことも絵画コンテスト等を実施してきたほか、東日本大震災被災地でのボランティア活動も続けてきた。

サッカー・ワールドカップと ブラジルの日系社会

日本からの史上最大の訪問者

ご承知のとおり、今年は、ブラジルでサッカーのワールドカップが開催されます。ブラジルでの開催は、1950年以来64年ぶりとなります。この大会で、ブラジル代表チームは、2002年の日韓共催の大会以来の優勝を狙っています。

一方、日本代表チームは、5大会連続の出場となりました。6月のグループリーグでは、レシーフェ、ナタール、クイアバの三都市で試合をします。3試合とも、すでに、ほとんどのチケットが完売となっています。残念ながら、ブラジルでは、日本代表チームはさほど人気がありませんので、これらの試合のチケットを買ったのは、ブラジルに住む日系人か、日本からの訪問者だと思われまます。

このように、大会期間中は、世界中から人々がブラジルを訪れますが、日本からも、これまでなかったような数多くの人がブラジルを訪れることが予想されます。

日系社会の動き

こうした状況を受けて、ブラジル国内の日系団体にも支援の動きが出てきました。

まず、最も大きな動きが、「ブラジルワールドカップ日本人訪問者サンパウロ支援委員会」の立ち上げです。この委員会は、在サンパウロ日本総領事館の協力の下で、日本からの観戦者の保護と援助をするため、ブラジル日本文化福祉協会（文協）、サンパウロ日伯援護協会（援協）、ブラジル日本都道府県人会連合会（県連）、ブラジル日本商工会議所、日伯文化連盟（アリアンサ）の主要日系5団体で組織されました。

現在、この委員会は、インターネットのコミュニティサイト「Facebook」上に、ページを立ち上げ、ブラジル国内での宿泊や緊急連絡先などの情報提供を行っています。また、各県人会の中は、訪問者に対し、サンパウロでの宿泊場所の提供

をするため、準備を始めるところも出てきました。

日本戦開催都市等の動き

日本戦の開催が予定されている三都市でも、支援の動きが始まっています。レシーフェでは、レシーフェ日本文化協会が「W杯日本代表応援委員会」を立ち上げ、万が一の際の対応の準備を進めています。ナタールでは、「ナタール日本人会」を立ち上げ、当日の対応について協議を進めています。クイアバでは、「ブラジル中西部日伯協会」が可能な対応について検討を進めています。

これらの三都市は、日本戦の開催時には、多くの日本人の訪問が予想されますが、日系社会としては、あまり大きなところではなく、そもそも都市自体も大都市とは言えないことから、現地での日系社会の対応は苦勞が予想されます。

また、関連して、日本代表チームが期間中キャンプ地とするイトゥーは、サンパウロ近郊の都市であり、日系人も数多く居住し、近年は日本企業の工場進出がすすんでいるところですが、具体的な支援の動きはないようです。当地には、浴槽が準備できたから、キャンプ地がイトゥーになったという人もいますが、今の日本代表チームは、ヨーロッパのチームに所属している選手も多く、日本国内の若い人は寒くなければ普段はシャワーだけというが多いので、「浴槽」は決定的な理由ではないでしょう。

ワールドカップでのアルバイト

このほか、ワールドカップの期間中に積極的にアルバイトをしようという日系人も多くいます。

特に、デカセギ経験者や、親のデカセギのために日本で育った若い日系人の多くが、その日本語力を生かして、ワールドカップに関連する仕事で貢献したいと考えているようです。

楽しい観戦の実現ために

ワールドカップの開催に当たって、これまで述べてきたような支援などの動きが出てくるところに、ブラジルにある世界最大の日系社会の底力を感じます。開催時には、多くの訪問者がその支援に助けられる場面が出てくると思います。

ただ、残念ながら、ブラジルにこんなにも大きな力をもった日系社会があることを、一般の日本人は知りません。日系団体についてもどんな組織なのかは知られていません。例えば、ある県人会では、格安で宿泊施設を提供する準備を進めているようですが、普通の日本人はブラジルの県人会というのを知りませんから、そうした宿泊施設は「危険な安宿」というように見えるのではないのでしょうか。「ブラジルは危険」という情報はいきわたっていますので、そうした誤解を解く必要があります。

日系社会の基本的な情報を広報することから始める必要がありそうです。

また、日本戦の開催三都市は、対応力が足りないのも、やはりサンパウロと連携して、対応する必要があるのではないのでしょうか。多くの訪問者は、飛行機の関係で、サンパウロからブラジルに出入りをすることになりますが、あくまで通過地点にしかありませんので、試合開催地での対応を充実する必要があると思われまます。

厳しい指摘もしましたが、なにより訪問者が楽しい観戦をして、日本代表チームが勝ち進むことを願っています。



決勝戦が行われるマラカナン・スタジアム（リオデジャネイロ）

けがと社会保険／学校のいじめ

相談センター 山形エレナ

(公財)海外日系人協会 日系人相談センター

■相談受付 月曜日～金曜日(土・日曜、祝祭日を除く)
14:00～17:30

■対応言語 ポルトガル語、スペイン語、日本語

■電話番号 045-211-1788

東日本大震災からの復興や施設の老朽化対策などの公共工事に加え、2020年の東京五輪開催に伴う工事などの増加が見込まれ、建設業界の労働力が不足するとして、政府は外国人労働者の受け入れの拡大を検討しています。一方で、日系人の集住地域である大泉町や太田市の存する群馬県の建設業協会のアンケート調査では、7割が直接雇用する考えがないとの回答であったとの新聞報道もありました。果たして建設業で働くために外国人が日本へ来てくれるのか。受け入れ策の多面的な検討が必要であると言えます。

(相談事例)

社会保険適用の範囲は？

相談 ケガをして入院しています。5年前、仕事場で事故に遭いました。その傷が1か月前に転んだ際に悪化し、入院することになったのです。元のケガの手当では労災の適応を受け、医療費もカバーしてもらったのですが、今回は無理だろうとあきらめていました。仕事を休まなければならず、お金に困っています。

一時期会社の社会保険に加入していましたが、今はもう脱退しています。それでも、資格はまだあるので、会社の社会保険で今回の入院費をカバーできるかもしれないという話を会社の担当者からも病院からも聞きました。それは本当でしょうか。また、どれくらいカバーしてくれるのでしょうか。

また、今度のけがで入院している病院は二つ目で、医者が保険事務所宛に書く書類の内容が一つ目の病院と二つ目の病院で異なるので、病院の費用は一つ目のものしか出ないと言われていました。

対応 カバーできる割合や金額は、本人が社会保険事務所に問い合わせるしかないと言いましたが、日本語ができないことと、病院から出られないことから、当方が代行して問い合わせました。

相談者が、医師と社会事務所がやり取りする書類を見ることは基本的には禁じられていますが、二つの病院で、医師が記載している内容に相違があることには、社会保険事務所も疑問を持っているようなので、改めて医師と直接話し、それから金額が決まるようです。

いじめと学校の対応

相談 子どもが学校でいじめに遭っています。かばんやノートには落書きされており、たまに痣を作って帰ってきます。私は日本語がわかりません。警察に行こうと思っていますが、それでも意思疎通ができないと思いますので、通訳してもらえませんか。

対応 子どものいじめについては、まず学校が対応します。日本ではいじめの問題がとても慎重に扱われるようになっており、学校側も放っておくことができなくなりました。まず担任の先生に相談をして、いじめを把握しているのか、解決できるのかどうか見極めることです。それでも嫌がらせが止まないよう

であれば、教頭に申し出、学年の問題として対応してもらい、他の教師にも呼びかけていじめに遭っている子どもを特に注意して見てもらいます。そこで嫌がらせの現場を確認したり、いじめの対象となっている子どもが助けを求めたりした場合には、いじている側の子どもの保護者を呼び出し注意したり、またクラスを変える等の処置をしてもらえる場合があります。

いじめに遭った子どもは精神的に強いダメージを受けていることがあります。学校に依頼すると福祉センター等のカウンセラーを特別に学校に招き、子どもの心のケアをしてもらうことができます。まずは、担任の先生と話をしてみてください。学校によっては対応の仕方が異なる場合もあります。また、当相談センターは通訳翻訳のサービスは行っていませんが、通訳や翻訳者を紹介することはできます。ほとんど場合、有料です。

引っ越しと粗大ごみの処分

相談 近所に、外国人がいない地域に住んでいます。私は日本語ができないので人とほとんど話すことがありません、時によって不安に陥ります。丁度、雇用契約が終了になったので更新せず、日系人が多く住んでいる所に引っ越しすることにしました。3日後に引っ越しるので、一般ごみ、粗大ごみや電化製品の処分をしなければなりません。一般ごみの回収日は違うのでしたら良いのか。特に困っているのが粗大ごみと電化製品です。

荷物の多くは前の住人が置いてくれたもので、引っ越しの際はすべて捨てるように言われました。約束だし、帰った後、人に迷惑を掛けたくないので、きれいにしたいと思っています。

対応 日本語が話せない相談者(男性)が住んでいる町役場に電話し、粗大ごみ、電化製品の処分方法を聞きました。粗大ごみは環境事業センターが回収するため「処理手数料券」が必要でした。物により値段が変わり、サイズを計ってから郵便局やコンビニで求めます。電化製品は買ったお店やメーカーが引きとってくれますが、急ぎの場合、民間の廃品回収を利用することになります。業者に電話し回収日を決めて、相談者に伝えました。